

本科 1 期 7 月度

解答

Z会東大進学教室

東大世界史



11章 明と清

添削課題

解答例

18世紀のフランスは、ブルボン朝絶対王政の下で旧制度の矛盾が表面化していた。ナント勅令廃止に伴う旧教理念の強化と産業の空洞化による財政難がもたらした封建的身分制度や不平等・非合理的な参政権と課税に不満が募っていた。こうした中、理性を重視して旧来の権威や偏見を否定する啓蒙思想が発達し、イエズス会士が伝えた清朝の社会情勢を参照しつつ現状に対する批判を行った。当時の清朝は合理的思考を持つ朱子学を重視し、建前上は科挙によって身分制に基づかない官僚任用を実施しており、啓蒙思想家はこれを理想的な社会と考えていた。一方で、文字の獄や辯髪令に代表される思想統制を持つ専制体制を自らの国家になぞらえて批判する者もいた。このように、啓蒙思想はフランスにおける旧制度が持っていた非合理性を批判・否定する理論的根拠となって、市民のみならず、封建階級の一部にも影響を与えた。さらに、この後に発生するフランス革命の思想・理念と結びついて定着し、19世紀に完成される近代市民社会を維持していくための原理を提供することとなった。(447字)

解説

《啓蒙思想家の中国観と歴史的意義》

東京大学の大論述問題としてよく見られる、異文化圏との接触とその影響をテーマとしたものである。設問文中にある史料が特徴的で、そちらに関心が向いてしまうかもしれないが、前段を含めて、その内容は解答を作成する上での示唆、ヒントであることをしっかりと認識してほしい。この設問で要求されていることは、後段に簡潔にまとめられているのだから、必要以上にヒントに縛られず、「求められていること」をまとめていってほしい。

まず設問の要求であるが、一見すると、『18世紀の時代背景、とりわけフランスと中国の状況』という表現がそれに該当するように感じるかもしれないが、ここでは、あくまでそれに触れながら、『彼らの思想の持つ歴史的意義』についてまとめるのである。その際に“知っている”“覚えている”からといって、『彼らの思想』の内容や展開に関する説明に終始しないよう意識することが大切である。歴史的意義とは「その思想が（社会や人に）もたらしたものと、そこから派生した事象」をさすものである。ここに挙げられているヴォルテール、レーナル、モンtesキューらがどのような主義主張を持ち、それをどのように提示していくかは、この場合問題ではないのである。その思想が一体後世に何をもたらしたのかをしっかりと示していってほしい。

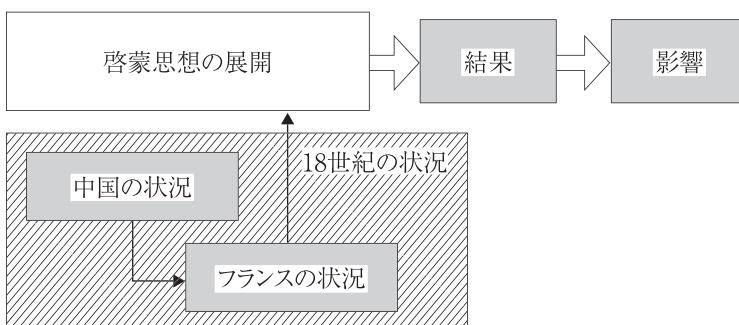
まず、『彼らの思想』を確定していこう。『18世紀のフランスの知識人』、その代表者としての『ヴォルテール、レーナル、モンtesキュー』というところから、この思想が、「啓蒙思想」であることがわからなければいけない。啓蒙思想とは、「人間の理性に絶対的な信頼を置き、

キリスト教に代表される伝統的な偏見や迷信などを打破して、合理主義による進歩と発展を確信して一般に広めていこうとする立場や思想」と定義されるもので、17世紀半ばのイギリスに始まり、18世紀のフランスで大きく発展したものである。ここでは解答として求められてはいないため詳述しないが、代表者であるヴォルテールやモンtesキー、ルソー、さらに百科全書派などの主張は周知のものでなければならないだろう。

次に、どのような条件が提示されているのかについて考えてみよう。まず、『18世紀の時代背景、とりわけフランスと中国の状況』に触れながら、という点に目がいくであろう。『背景』とされているのであるから、「啓蒙思想」が展開する「理由」としての『状況』であることをしっかり認識しよう。この点に気づかないまま、漠然と『18世紀のフランスと中国の状況』を示したとしても、それは設問の要求に応えたとはいえない。『18世紀の時代背景』の中から啓蒙思想の展開を促したものを見抜き出してまとめてほしい。最後に指定語句の扱いについてであるが、東京大学の大論述問題では、8~9個の指定語句が示されているが、その中には解答においてどの部分にその語句を使用するのかが不明瞭なものが含まれていたり、本来、設問の要求に応えるためには外すことのできない語句が、含まれていなかつたりして、扱いが難しい。とくに、ここで挙げた後者の場合、構成をしっかり立てられないまま、指定語句に頼った解答作成をしてしまうと、「書くべきことを書いていない」解答が出来上がってしまうことになる。これを避けるためにも、しっかりと構成を立てたうえで、その中に指定語句を当てていくかたちで解答を作成する意識を強く持つてほしい。

では、構成を立ててみよう。まずイメージをしっかり持つために、「啓蒙思想の展開」の様子を模式図にしてみよう。

下図における網掛けの部分が、この設問で求められている内容であることを確認しよう。とくに啓蒙思想の展開については求められてはいない以上、答案の中に組み込まないよう注意してほしい。この模式図の中に、指定語句を当てはめ、隠された指定語句ともいべきものが何かを考えて行ってほしい。また、18世紀の状況に関しては、設問文に『彼らは中国を鏡として自国の問題点を認識したのであり、中国評価は彼らの社会思想と深く結びついている』とあるように、啓蒙思想と中国の状況の関係を重視しよう。その際に、史料部分に示されている、啓蒙思想家たちの中国への評価を参考にするとスムーズにまとめられるであろう。



以上に示した内容を考慮し、答案に盛り込むべき項目を以下にまとめていく。実際の入試の際には、このように丁寧にまとめる時間的余裕はないであろうから、「自分がわかる」形でのメモ書きで構わない。

【18世紀の状況】

<フランス>

ナントの勅令廃止⇒旧教の不寛容さと非合理性を助長&産業の空洞化による旧制度の硬直化

↓
非合理・不平等な参政権と土地所有&課税⇒啓蒙思想の発展

↑

イギリス市民革命=社会契約論

イエズス会士による中国の紹介

<中国（清）>

康熙帝・乾隆帝時代=全盛期：中華帝国としての理想実現&征服王朝としての思想弾圧

①専制政治〔恐怖による〕

皇帝専制&文字の獄、辯髪令、禁書 etc.

⇒反面教師

②合理性

〔科 挙…身分の合理性〔能力主義〕〕
〔朱子学…思想の合理性〕

⇒旧制度・現体制批判の根拠

【歴史的意義】

《結果》旧制度の非合理性を批判・否定する根拠となる

《影響》フランス革命における革命思想・理念に結びつく⇒近代市民社会の原理を提供した

このような構成メモを作成することができれば、あとは見たままを文章化していくことで良いことになる。知識のみに頼ることなく、しっかりと設問の要求を理解し、解答作成を行えるよう練習を重ねて行ってほしい。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

12章 イギリス産業革命とアメリカ合衆国の独立

添削課題

解答例

前者の変化は、賦役の廃止に伴う、領主と農奴の関係が変質したことによる生産意欲の向上と、木製農具を使い人力に依存した耕作から、重量有輪犁などの鉄製農具を使った耕作への移行、三圃式農業により土地の有効利用が可能になったことである。後者の変化は、ヨーマンや借地農による零細的な生産が、囲い込み運動によって、農業労働者を大地主が雇用する大農経営に転換したこと、従来の小型の農具が大型のものにかわり、ノーフォーク農法による、家畜の飼育を伴った混合農業の本格化である。両者の基本的相違は、制度面では、前者があくまで自給食糧生産を前提としたもので、農奴は小作人にとどまつたのに対して、後者は都市部への供給を前提とした大地主による資本主義的経営の採用となった点であり、技術面では、前者が休耕地の存在を前提としていたのに対して、後者は、穀物と飼料を交互に栽培することで休耕地を持たなかった点が挙げられる。(393字)

解説

《中世～近代のヨーロッパの人口増加と食糧増産》

農業技術の変化に関するものである。テーマ自体があまり馴染みのあるものではないだろう。また、設問の要求も単に変化を求めているだけではないので、少々とっつきにくいものではないだろうか。しかし、歴史の大きな変革に、食糧生産の要でもある農業技術の進歩が絡んでいることが重要な視点である以上、解法だけでなく、その内容に関してもしっかりと理解しておくべきものである。

まず設問の要求であるが、一見すると、「農業の制度的ならびに技術的变化」という表現から、単純な変化の説明を示すように感じられるだろう。しかし、設問文をしっかりと吟味すれば、『2つの時代に起こった農業における変化の基本的相違』、が設問の要求となっていることに気づくのではないだろうか。つまり、変化したことそのものが問われているのではなく、その変化の持つ性格の相違が求められているのである。従って、設問文に示されている2つの時期に発生した農業上の変化を羅列するだけでなく、その変化の質がどのように異なっているのかをしっかりと示さなければならないのである。もちろん、そのためには「変化」そのものの具体的な内容を把握することが必要となるが、それのみを答案に記載して満足してしまうと、設問の要求に半分も応えられていないことに気付いてほしい。

まずは、設問文に示されている2つの時期に、同様な変化が起こったのかを考えていこう。変化とは、食糧増産が起こった前後の状況が異なっていることをさす。設問の設定から考えれば、(1)の時期については、14世紀前半よりも以前に、この変化が起こっていることになる。つまり11世紀頃の状況に比して、13世紀頃には農業の形態が変わっていたということであろ

う（でなければ、14世紀前半をピークに人口が増大しなくなってしまう）。11世紀頃の西ヨーロッパでは、まだ古典莊園が健在で、農奴には貢納（生産物地代）・賦役（労働地代）が課せられていた。しかし、賦役労働は非効率で、農奴の生産意欲を刺激するものではなく、農業生産性は頭打ちの状態であった。また、使用されている農具は木製のものが中心で、人力に頼った農耕が農業生産性の停滞に拍車をかけていた。農法に関する限りでも、略奪農法に近い段階で、地力をいたずらに消費するのみであった。しかし、気候の温暖化や封建社会の安定・成長に伴って、技術革新が行われることで状況は変化した。貨幣経済が復活し、これが莊園経済を変質させていくと、領主たちは賦役を廃止して貢納に一本化した。このことで、蓄財が可能になった農奴たちの生産意欲は向上し、技術革新も大いに進んだ。鉄製の農具が普及し、犁・水車などの改良、牛耕農法の登場などが生産性を向上させた。また、休耕地を設けることで地力の回復をはかる三圃式農業が採用されたことにより、農業生産は増大し、人口は飛躍的に増大した。

次に、(3)の時期については、18世紀前半に起こった変化が、その後半になって飛躍的な人口増大を引き起こしたのだから、17世紀の状況と18世紀前半の状況を対比させればよい。17世紀の西ヨーロッパは、“危機の”という形容詞がつくほど混乱に満ちていた。気候が寒冷化し、疫病や凶作が波状的にやってきては、人々の生活を荒廃させた。このような中、農業技術の進歩も停滞しており、中世末期以来の農法と、中規模以下のヨーマン（独立自営農民）や借地農による生産性の低い耕作が続けられていた。しかし、17世紀末に近づくと、各国の重商主義政策の発展や、国家の統合が進んだことにより国力が増大した。気候の温暖化もあり、人口が増加傾向に入ると、食糧確保のために農業を取り巻く環境は大きく変化していった。従来の休耕地の存在を前提とした三圃式農業から、カブやクローバーの栽培によって地力を回復させつつ、休耕地を設げずに輪作を行うノーフォーク農法が普及し、農業生産力は増大していった。余談ではあるが、東京大学志望者の中で、地理を受験科目としている者は、このような農法やその効果などに触れる機会が多いであろう。それを地理受験のためだけに使うのではなく、このような問題を解く際の“隠し技”として使用できるよう意識をしておいてほしい。

さて、このような状況を背景に、産業革命期を迎えるイギリスを中心に、各国が貿易の拡大をはかると、大都市が登場、その経済活動が活性化していくことになった。さらに、輸出品を生産するため手工業が発展すると、都市への人口の流入が進むとともに、ヨーロッパの人口は持続的に増加することとなった。このことが都市民の穀物需要を高め、高い生産性を求めた動きが農村部でも見られた。大地主たちは村の共有地や小作地を囲い込むことにより、大規模な農業経営を進め、土地を失った農民は農業労働者となると同時に、都市に移住して工場労働者となっていました。経済の発展と安定した食糧供給が実現することによって、人口はさらに増加することになるのである。

以上のような状況から、(1)・(3)の時期における変化をまとめると、次のようになるであろう。この際に、注意しておきたいのは、ただ単に前後の状況を羅列するのではなく、対比すべき項目をしっかりとそろえておく、ということである。「変化」とは同一の事象が、前後において異なることである以上、異なる項目を対比したところで「変化した」ことを証明することにはならないからである。

	(1)		(3)	
	前	後	前	後
制度	貢納・賦役	貢納に一本化	ヨーマン・借地農による耕作	囲い込みの進展 農業労働者の採用
	農奴の意欲薄い	生産意欲の向上		
技術	木製農具	鉄製農具		
	人力の鋤	重量有輪犁	重量有輪犁	大型の犁の登場
	地力の消費	三圃式農業	休耕地の存在	ノーフォーク農法

これで、第一段階の『農業の制度的ならびに技術的变化』についてはまとめられたことになる。そのうえで、この時に見られた変化とはどのようなもので、そこにどのような基本的相違があるのかを考えていこう。まずは、制度に関して見てみると、(1)の時期に関しては、自給食糧の生産を前提とはしているが、農奴の生産意欲向上に伴って余剰生産物が登場したこと、その一方で、農奴の地位は小作人に留まり、自作農や農業労働者の誕生までには至らなかったことが挙げられる。(3)の時期に関しては、生産の増大が都市部への供給を前提としている点と、土地を離れたヨーマン、借地農が、賃金を生活の糧とする農業労働者となって大規模農業経営者に雇用される資本主義的経営に移っていった点が挙げられるであろう。技術面に関しては、個々の時期において使用される農具にもちろん相違はあるが、木製のものが鉄製に変化して以降、材質に大きな変化はなく、人力から畜力への移行もこの段階では大きな差異とはいえない。それに対して、農法に関しては、休耕地の存在を前提としている三圃式農業から、穀物と飼料を交互に栽培することで、休耕地を必要としないノーフォーク農法へ展開した点は、大きな差異といえるだろう。以上の点を踏まえれば、各時期の変化の基本的差異は以下のようにまとめることができるであろう。

[相違について]

- ①制度に関して…農奴の生産意欲向上（自給食糧生産を前提）に伴う余剰生産物登場に対して、都市部への供給を前提とした農業労働者（賃金を生活の糧とする）を使用した資本主義的大農経営
- ②農法に関して…休耕地の存在を認める三圃式農業に対して、休耕地を設けないノーフォーク農法

変化についての説明が多少長くはなるであろうが、結語としてこの「相違」がはっきり示せるかどうかがカギになるであろう。設問文の意図を読み違えることなく、しっかりとその要求に応えられるように練習を重ねていってほしい。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なるれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

13章 フランス革命とナポレオン

添削課題

解答例

問(1)

キリスト教の保護者を自任したカールは、教皇からの戴冠で統治の正統性を裏付けした。キリスト教的国家理念の実現をはたすための人材には古典教養を求め、ラテン文化の復興が進められた。ナポレオンは国民の支持を背景に革命の成果を継承しつつ、国民統治に教会を利用した。カトリックの復権を認める宗教協約を教皇と結び、共和暦も廃止した。他方でプロテスタントも公認し、ナポレオン法典では信仰の自由を明示した。(194字)

問(2)

前者の側面は、ナポレオンが封建的圧政からの解放を掲げたこと。大陸各地でフランス革命理念の自由・平等の下に君主・貴族支配を打ち倒し、フランスをモデルとする行政・法制の改革がなされた。その後のフランスに利益をもたらすための各地での支配継続策には後者の側面が見られる。フランス軍の進駐資金はその地に負わせ、ナポレオンの親族を支配地の元首につけ、大陸封鎖令を発した。これらへの抵抗には軍事的制裁が加えられた。(200字)

解説

《ナポレオン》

問(1) カール大帝への戴冠は、カール自身よりもローマ教皇レオ3世が望んだものとされる。教皇が東ローマ皇帝に対抗するための強力な政治的後ろ楯を求めたからである。カールもキリスト教の保護者を自任し、教会組織を整え国内支配の拠点とし、キリスト教的国家理念に基づく統治を進める。そのための行政実務を担当する官吏と聖職者の資質をラテン語・ラテン文化知識に求めた。そのために、イングランドからの神学者アルケインの招聘・ラテン語知識やラテン語教育の拡充などラテン文化の復興をめざし、ローマ風教会も建設された（カロリング＝ルネサンス）。

ローマ教皇をパリに招いた1804年12月の戴冠式以前に、ナポレオンは同年5月に行なわれた国民投票で圧倒的多数の承認により皇帝となっている。ナポレオンは教会を民衆（国民）統治に利用することをめざした。

ナポレオンはフランス革命で生じた宗教的分裂の解決のため、1801年に教皇との宗教協約（コンコルダート）でカトリックを復権した。これはカトリック信仰を持つ農民層に安心を与えるものであった。その一方でフランス革命中に没収された教会財産の返還は行なわれず、教会は革命による土地改革を承認することとなった。キリスト教的な時間枠からの脱却をめざした共和暦（革命暦）が1806年に廃止され、旧来からの太陽暦であるグレゴリウス暦を復活させる。しかし、旧王政時代のようなカトリックのみでなく、プロテスタントやユダヤ教も公認する。ナポレオン法典では法の前の平等、所有権の不可侵などとともに信仰の自由が示された。このようにナポレオンは革命を終えると同時に革命の成果も継承する形をとり、革命が倒した

「王」ではなく、カール大帝を思い起こさせる「皇帝」の称号も用いた。皇帝との称号はフランスに併合された地域へも及ぶ主権者の意味がこめられたものである。

問(2) ナポレオンの「革命的英雄」と「侵略者」という二面性を問う標準的な出題。フランス革命の理念はナポレオン軍の対外進出で各地に広まり（革命の輸出）、各国で君主支配・封建支配からの解放がなされる。「革命的英雄」とはフランス革命の理念を継承し、広めた側面である。しかし、各国で解放後になされたフランス（ナポレオン）軍の支配体制やフランスが行った政策は、「侵略者」ナポレオンに対する各国でのナショナリズムの芽生えと、「侵略者」への抵抗を生み出してゆく。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--